

なよ竹のかぐや姫 現代語訳

左の現代語訳と教科書の本文を照らし合わせて、教科書の同じ位置に段落番号とノを書き入れなさい。

今となつては昔のことだが、ノ竹取の翁という者がいた。ノ翁は、野山に分け入つて竹を取つては、ノ様々な用途に使つていた。ノその名は、讃岐の造と言うのだった。ノ（翁が取るうとする）その竹の中に、ノ根元が光っている竹が一本あったのだった。ノ翁が不思議に思つて近く寄つて見ると、ノ竹の筒の中が光っている。ノそれを見ると、三寸ほどの女の子が、ノたいそうかわいらしい様子で座っている。ノ

翁が言うには、ノ「私が毎朝毎夕見ている竹の中にノいらつしやるから、分かつた。ノ私の子になりなざるに違いない人のようだ。」ノと言つて、手のひらにそつと入れて、ノ家に持ち帰つた。ノ妻のおばあさんに預けて養育させる。ノかわいらしいこと、この上もない。ノたいそう小さいので、竹の籠に入れて育てる。ノ

竹取の翁が竹を取ると、ノこの子を見付けてからというものの竹を取るとノ節を隔てた空洞の部分ごとにノ黄金がつまつている竹を見つけることが度重なつた。ノかくして翁はだんだん裕福になつていった。ノ

この幼子は、育てるうちにノすくすくと、ぐんぐん大きくなつてくる。ノ三か月くらいになるとときには、ノ年ごろの女性のようになつたので、ノ翁は髪上げのことなどあれこれ準備して、ノ髪を結い上げさせ、裳を着せた。ノ室内のとばりの中から外へも出さないようにして、ノ大切に育てた。ノこの子の顔立ちがノ光り輝くばかりに美しいことは、世にまたとなひほどで、ノ家の中は暗い所はなく、ノ明るく光が満ちわたっている。ノ翁は、気分が悪く苦しいときにも、ノこの子を見ると、苦しさが癒えた。ノ腹が立つことも慰んだのだった。ノ

翁は、（黄金の入つた）竹を取ることが永く続いた。ノ翁は財力豊かな富豪になつた。ノこの子がたいそう大きくなつたので、ノ（翁は）名前を御室戸齋部の秋田と呼んで、付けさせた。ノ秋田は、「なよ竹のかぐや姫」という名を付けた。ノこの間三日間、ノ翁は命名披露の酒宴を開き、歌舞管絃の遊びを続けた。ノ様々な歌舞音曲の数を尽くして遊んだことであつた。ノ世間の男をだれかれかまわず呼び集めて、ノ実に盛大に遊んだのである。ノ

世の中の男は、ノ身分の高い者も低い者も、ノみなこのかぐや姫を妻にしたいものだノ見てみたいものだ、ノ（その美しさの）評判を耳にして称賛し、思い乱れた。ノ